

書評

青木 理^{あきま り}、神保哲生^{じんぼ てつせい}、高田昌幸^{たかた まさゆき} 著

(産学社) 1500円 税別)

『メディアの罠』

権力に加担する新聞・テレビの深層

表紙の帯に「『ウソ』だらけの報道は構造的に生み出されていた」とある。本当にそうなのか。

著者3人は、組織メディアで記者を経験し、退社後もジャーナリストとして取材活動が続いている。青木は共同通信社、高田は北海道新聞社で記者として優れた業績を残した。神保はAP通信社などの記者を経て、独立系インターネット放送局を設立した。

近年、新聞やテレビに対する批判、非難、攻撃はおびただしい。従来、批判は雑誌メディアが中心だった。最近では、批判者、攻撃者はネットを使って直接やってくる。小沢一郎民主党元代表は「新聞やテレビは本当のことを伝えな」とネット動画で呼び掛ける。橋下徹大阪市長はツイッターで記者を攻撃した。それが喝采を浴びる。

ネットの掲示板では、匿名によるメディア批判は人気コンテンツだ。ここを発信源とした風評は膨れ上がってネットを浮遊している。

それは違う。しかし、既存メディアには問題がある。3人はそこを語り合う。

神保はメディアの役割を「一般の人々が知り得ない事実を、本来知っておかねばならない情報を、取材によって丹念にくみ取り、広く伝えること」と定義する。また、青木はメディアを民主主義社会における重要な基本インフラ、公

共財と位置付ける。

座談会は、その基本インフラが特権を持っているのに、その自覚がないと批判する。一つは、新聞の宅配網とテレビに割り当てられた周波数という伝送路。二つ目は記者クラブ。この二つを全国の有力メディア16社が支配している。神保は三つ目に、新聞社とテレビ局が同系列資本を構成するクロスオーナーシップを加える。

問題は、その特権を持ったメディアが役割を果たしているのかである。

青木は東日本大震災の現場へ行き、すさまじい状況の前に無力感だけが残ったという。マクロの状況を把握し、ミクロの人々の声を拾って描けるのは組織メディアしかないと感じる。しかし、現実には原発に近寄らない取材活動、当局の指示に従う組織メディアの姿だった。

現場から隔離された記者には東京電力の記者会見が重要な取材源となった。しかし、会見場はフリーの記者も参加して、留飲を下げるポビエリズムに陥った(神保)。メディアが社会のストレス解消装置になっていると感じる(青木)——という。

さて、冒頭に戻って、「ウソだらけ……構造的……」のきつい見出しは正しかったのか。

「構造的」に関して、現状のメディアが持つ問題点、課題はよく提示され、整理されている。

。「ウソだらけ」についてだが、今のメディアは読者に「ウソだらけ」に見えていると思う。

新聞の特色の一つは一覧性である。紙面を開くとニュースが概観できる。

ところが、解説や連載記事は見出しだけでは分かりにくい。概観できない。よく読むこと、続けて読むことが必要である。原発に関して優れた記事が少なくなかった。しかし、読み込んだ読者はどれほどいたか。長期連載は途中から読むようには作られていないし、一丸ごと埋める長文インタビューは、いくらいことが書かれていても、読者に伝わらない。雑誌だと、ページをめくることで視線を切り替え、長文を読み込みやすくなっているのだ。

もう一つは、「総合情報」という新聞の在り方である。あらゆる情報を網羅して読者に届けるサービスは新聞の売りだった。

しかし、ネットの登場で「あらゆる情報」が掲載されていないことが分かる。新聞はポータルから、一部の情報を扱うコンテンツプロバイダーとなった。ヤフーなどネットのポータルサイトは、新聞の他に多くのコンテンツを収容している。新聞記事は有力なコンテンツではあるが、全てではない。記事の人気ランキングでも上位にない。

テレビは報道番組とワイドショーがごっちゃになっており、視聴者には見分けがつかない。ワイドショーは新聞からの情報をつまみ食いしており、新聞記事は「ウソばかり」の印象に一役買っている。やはり、新聞・テレビには構造的な課題がある。

(蜷川 真夫) J-CAST ニュース 発行人、元朝日新聞記者